
アメジスト

しらせ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメジスト

【Nコード】

N4310Z

【作者名】

しらせ

【あらすじ】

楽して生きることがすべてなアメジは100年の時を越えて巨大破壊生物「黒水晶」と戦う。異世界少女アクション。チベット密教文化からインスピレーションを得た世界観。 サイト掲載作品を手直ししつつのUPです。 2006/02/18完結済。 全70話。

第1話

「おのれーおのれモンドめーっ。大地の底から呪ってやるうーっ。」

冷たい石の棺の中、少女はうなり声を上げていた。

なぜ、自分はここにいるのか、考える余裕すらなかった。

怒りにまかせて、自分の最期を實にくだらな理由で決めてしまった。

「あたしと結婚するって約束したじゃん。ガキのころから、ずっと前から交わした約束をっ」

少女が怒っているのは失恋？ いや、少し違う…。

「やぶるかー？その日につ、自分が族長になる、その日につ。族長の妻の座っ、あたしの夢っ！」

夢、自分の夢を台無しにされた事に対する怒りと…

「あんな大勢の前でだっ、あたしゃ、ちょーはしゃいで、とんだ赤っ恥だつての。よりによって、同じ巫女のシルバと、あんな地味な女と…」

プライド、プライドを傷つけられた事に対する怒り。

なぜ彼女はこんな棺の中にいるのか、だ。
それは、彼女の夢が破れた直後の事…。

「アメジよ、水晶の聖乙女、やってみる気はないか？」

白い髪を肩まで伸ばした初老の男は少女に問いかけた。

アメジと呼ばれた少女は、大地に寝転がったまま、答えた。

「トパーズ様。なに？ それ。あたし面倒臭い修行やだからね」

ふてぶてしく答える少女、しかしいつもの事なのだろうか、そのトパーズと呼ばれた男は態度を変えず、続けた。

「水晶の聖乙女は大地の底から、このリスタルの民と大地の為に、ただ祈り続ける。」

これはアメジ、巫女としてろくに修行をしておらんお前でも、立派にこなせる役目だぞ。どうだ？」

「それって、確か、生き埋めになるってやつじゃない？ ジョーダン！ あたしには夢があるの、そんなくだらない事、やるわけないじゃん。」

「そうだな…。ま、無理にとは言わん。だが私も大神官として、お前を巫女として育てねばならん。それにお前の父にお前を一人前に育てあげると約束したからな。」

「オヤジのことはいいじゃん。勝手に遺跡の研究だとかで、山の遺跡で死んじゃった奴の事は。」

アメジの父はどうやら放任主義だったようだ。自分の意思を縛られるのが嫌で、趣味であり、生きがいであった古代の遺跡やら、このリスタル独自の特殊なチカラ、この地の民は「水晶」と呼ぶそれを研究していた。

それは生あるモノの中にある気の流れ、人間をはじめ、この世の生

物はこの大地から、流れてくる気によって、エネルギーを得ている、という。中国でいう気孔のようなものだろうか、そのチカラを水晶と呼ぶのだと。

「お前はほんとにオールドに似ている。いいところも、悪いところも。」

「げっ、やめてよ、トパーズ様っ。あんなのと似てるなんてーっ、嘘でも言わんといてーっ。」

「ハハハ。」

「そろそろ広場まで行かないと。ほら、今日はモンドのっ。」

「ああ、そうか。あやつもついに族長に就くのか、お前以上に心配な奴だからな。」

「だから、トパーズ様がしっかりサポートしてやってよ。あたしだって楽できるしー。」

「ん、アメジ、どういう事だ？」

ここリスタルは、北は山脈、南は草木も無い砂漠に囲まれた、山岳地帯にある集落である。厳しい環境の為か、外からも内からも人や生物の移動は無く、陸の孤島と化していた。

唯一の集落、リスタルの民が住むこの街の中心にある広場に、アメジは走っていった。

今日はあるイベントが開かれる。モンドの族長就任の式だ。

モンドは族長の息子であり、アメジとは従兄妹であった。モンドはアメジに負けず劣らずの、ダメ人間だった。

アメジと交わした結婚の約束も、族長になれば、周りが世話をやいてくれると思い込み、お互い楽したいがための約束だった。

アメジは息を切らしながら、広場の人の波をかきわけながら、台の上で挨拶を始めるモンドへと近づいていった。

「モンドっ。」と、小さくアピールするが、彼の視線はまったく別のほうへ向けられていた。

「みんなー、あと今日は、オレの花嫁となる人も紹介するー。」

台の上でだらしなく揺れながら、へらへらとテレながら、彼はその花嫁の名を呼んだ。

「そう、その花嫁は、あたしっつ！」

モンドが話す前にアメジが叫んだ。

「ええっ、アメジ？おいモンド、マジかよ？」「あのケツでか女だぞ。」

周りの若者たちが野次を飛ばす。

「うっさいんじゃないっ、カス共！前から決まってた事なの！ね、モンド。」

「い、いやアメジ…、オレの花嫁は…。」アメジから目を逸らしながら、モンドは言った。

「シルバだっつ。」

「…はあっ？」

モンドは隣にシルバという少女を呼んだ。

頬を染め、目を伏せながら少女はモンドの傍へと駆け寄った。えへと、照れながら寄り添う二人には祝福の声が上がる。

逆にアメジには「バツカじゃねーの、こいつ。」「とんだ勘違い女だよ。」

馬鹿にされてる。

激しく馬鹿に……。怒りがこみ上げ震えだすアメジ。

「ご、ごめんよー、アメジ。言おうと思ってただけどさ、タイミングがさ。」

いいわけモンド、しかし、今こそ最悪のタイミングではなかるうかキッとモンドを睨みつけるアメジ。殴られると感じたモンドは反射的に身構えてしまった。しかし、アメジは鬼の形相のまま、広場から走り去ったのだ。

夢破れし、アメジの思考はぶち壊れていた。

アメジが向かったのは、街の外の山道。その先には、古代の遺跡の一つ、「水晶神殿」、岩壁を削られ造られてある。

そこには、トパーズと巫女の少女がいた。

「どうしたアメジ、用なら後にしろ。これから【水晶の聖乙女】の儀式をせねば…」

「まって、ソレ、あたし、やる。」

「ええっ?!」

何があつた、と聞くトパーズには答えず、石の棺へと勝手に入っていくアメジ。

「立派な聖乙女になります、とモンドに伝えてください。」

夢叶わぬこの世に未練などなく、あの世から呪いを放つ道を選んだ。そして、いつのまにか、眠りについていったのだった、モンドめ、とつぶやきながら…。

あれから何時間眠っていたか、まぶたに光を感じアメジは起こされた。

トパーズ様？ いやちがう。若い男。反射的にアメジは飛び起きた。

「モン…」 叫びかけたアメジより早く、その男は語りかけた。

「あなたが、水晶の聖乙女殿。」

「え。」

目の前にいる彼はアメジのまったく知らない男だった。

「だれよ？ あんた…。」

「私はリスタルの族長を務める、ジストと申します。」

（なに言ってるの、こいつ、族長はモンドがなったばかりじゃ…？）

この出会いこそアメジの樂して生きる夢を遠ざけることとなってしまった。

第2話

「ジストー、もう、止めるたるよー。」

「タル。この石棺で最後だ、もう少し待っててくれ。」

冷たく静かな水晶神殿に、一つの人影と一つの小さな影があった。

この遺跡には、百年前まで行われていたというある儀式にその身を捧げた少女たちの亡骸が納められていた。

標高の高い、このリスタルの地の、ここはさらに天に近い場所である為、神殿内に時たま、冷たい風が流れこんでくる。

青年に付き添ってきた小さな生物は風によって、毛を膨らませられ、寒さに震えていた。

青年は最後の石棺に手をかける。

「どうせまた骨たるよー。もう骸骨はイヤたるー。」

どうやら他の石棺は、すべてこの青年が開けたようだ。石棺の中にいた少女達は、皆骸と化していた。なぜ、彼はこんな事をしているのか…。

「フンツ」青年は石の蓋を持ち上げようと力を籠める。

しかし、いくら大の男であれ、一人で持ち上げられる重さではない。だが、蓋はゆっくりと動きだした。

彼は体内の水晶（このリスタル独自の気の使い方）を自在に操れる「水晶使い」だった。

手のひらが、ポウと光りながら、さらに力が高まっていく。その数秒後、蓋はみごと外れたのだ。

「ああつ、どーせまた骨骨たるつ。だいたい百年前の人間が生きるわけないたる。」

「タル…。見る…」

「生きてたらそいつバケモンたる。そいつこそ黒水晶たるよっ。」

「タル、生きてるぞ、彼女だ…。ラルド様の言った通りだ」

「へ、ええっ？」

その石棺の中には、今にも目覚めそうな少女の姿があった。

興奮を抑えながら、青年は少女へと近づく。

「んんっ。」「少女の目蓋がぎゅっと動いた。」「あっ！」

少女が目を覚まし、彼と目が合った。

「あなたが水晶の聖乙女殿」

彼はそう語りかけた。わけもわからぬ顔で彼を見返す少女とは対照的に、青年の顔は、輝きに満ちていた。

アメジ、フリーズ状態

大地の底から呪ってやる、と。「水晶の聖乙女」をやるといいだした自分。

自分をフツたモンドに対して、石棺の中でどこかと怒っていたのは何時間ほどか…？

気がつきや目の前に見ず知らずの男。しかも、言ってる事意味不明！とりあえず、深呼吸、でもう一度、男に問いかける。

「で、あんた、誰？」

「ですから私は、現在族長を務める・・・。」

「へ？モンド、もう面倒臭くなって、族長辞めたのか？」

「モンドとは？」

二人の問答をイライラと聞きながらも一つの口が開いた。

「ジスト、こいつダメっぱいたるよ。きっと、百年も眠っててボケたに決まってるたる。使えないたるよ。」

生意気に話す小さな生物を見て、アメジは驚いた。

「ブツ、ちよつ、こいつまさか聖獣？」と、なぜかふきだすアメジにジストが「そうだ」と答えた。

「タルは私の良きパートナーです。」

彼らが聖獣と呼ぶその哺乳類は、このリスタルの地に、リスタルの民が移住してくるずっと昔から、ここに住んでいた。

彼らは、人と共存する道を選び、言葉を理解し、話せるまでになった。

彼らも、水晶のチカラをその身に秘めており、ジストのような「水晶使い」と組んで、共に過ごしている。

「あたしが知ってる聖獣のプラチナは、もっとスラっとしてて、足も顔もスツキリしてて……」

「プラチナ知ってるたるか？タルのご先祖様たるっ。」

「は？ご先祖？何言ってるんの、まだ現役よっ。だいたいアンタみたいなブツサイクな聖獣見たことないわよ。」

「ぶつちーっ。ブチキレたるーっっ！」

次の瞬間、アメジが激しくブツ飛んだ。タルの飛び蹴りが炸裂したのだ。

「どこあーっっ。」

変な悲鳴を上げ、凄まじい格好で、アメジはすっ転んだ。

「コラっ、なんてことしてんだ、タルっ。」

ジストがひょいと、タルを抱き上げた。

「だってー、ジストー、こいつがタルのことバカにしたたるからー。」

「だつてさ、ほんとにブツサイクなんだもん。こんなモチみたいにぺったんこな顔でさー。」

アメジが、ムクリと起き上がった。

「いいか、タル。私達は、聖乙女殿にお力を借りにきたんだぞ。」

「??」（あたしの力を借りに来た?どーゆーこつちゃ?）

「うつつ、でもでも、タルとジストでがんばれば、黒水晶なんて倒せるたるっ。」

「それができないからこーしているんだろ?水晶使いと聖獣だけでは、黒水晶とまともに戦えない。」

「黒水晶……」アメジはその名に聞き覚えがあった。

（でも、それって確か、あたしが生まれる前に絶滅したって聞いたけど…）

「黒水晶と戦うには、私とタルだけではダメだ。巫女のサポートが必要だろう。」

「巫女ならサファがいるたるー」

「サファは、まだ前の戦闘での疲れが癒えてない。今では巫女も彼女一人になってしまったからな。」

黒水晶と戦う?

やっぱりアメジには、この二人の会話は理解不能だった。

黒水晶は知っている。この目で生きているところは見たことは無いが。

以前アメジの父「オールド」が亡くなった後、葬式で初めて知り合ったモンドと一緒に、父オールドがよく通っていた山脈にある遺跡をと巡ったりしていた。

その山道の途中、何度か目にした、巨大な生物の化石。

このリスタルに、昔からいたといわれ「黒水晶」と呼ばれている。

見た目は鳥類のようで、はるか昔に滅んだ恐竜にも似てる。

その体は巨大で3Mから10Mはあるといわれた。さらに、凶暴で人を喰らい、その体内には毒を宿し吐く息だけでも、生物を死に追

いやったという。

全身ドス黒く、目も不気味に黒くギラギラと輝き、大きなその体には、桁外れな水晶を秘めていた。そのことから、人々はその怪物を黒水晶と呼び、恐れたのだ。

しかし、リスタルの民は、実に好戦的な民族で、恐れるだけでなく、戦う道を選んだのだった。

その戦いの歴史は、リスタルの民がこの地に移住してきた、千年も昔から続いていた。

人は、聖獣と力を合わせ、たくさん犠牲を出しながらも生きぬいてきたのだ。

その戦いも、アメジが生まれる少し前、アメジの父オルドや、その弟でありモンドの父の二人が中心となり、黒水晶を絶滅させ、長い黒水晶との戦いの歴史に幕を下ろしたのだった。

（そう、黒水晶って、とっくの昔に滅んでんじゃん。なのに、こいつらの言ってる事って…。）

「とりあえず、街に戻ってラルド様に報告しよう。黒水晶がこの辺りに戻ってくるまえに。」

さ、聖乙女殿。私と一緒にきてください。詳しくは、向こうでお話します。」

混乱ぎみのアメジに、ジストが優しく手を差し出す。タルはまだ不満げだが。

（よくわかんないけど、こいつが族長ならあたしの夢もまだ、終わっちゃいないよね？

ふふふ、ってかモンドより断然いい男だし。）

怪しい笑みを浮かべるアメジに、タルがピクリと反応する。
アメジは未だ自分が百年先の未来にいる事に気づいてはいなかった。
そして、この直後に会おう、最悪の出来事にも……。

第3話

「聖乙女殿、足元に気をつけてください」

「おおっ、どうも……」

ジストに導かれ、アメジは水晶神殿を出る。そのジストの隣をブツクサと不満気なタルが歩く。

アメジ、この面倒くさがりな女の瞳は希望に満ちていた。

「夢は終わってないぜっ！」

「え、なにか言いました？」

「ねえ、アンタさ、もしかして結婚してる？」

「え、いいえ。まだですが……」

「よっしゃーっ！」とアメジがガッツポーズをとった瞬間、タルの飛び蹴りがまたも炸裂した。

「いってーっ。またやりやがったなー、モチ聖獣ーっ。」

「お前っ、今ジストのことやらちー目で見てたたるよっ。」

こんのー！と、もみ合いそうな二人をジストが止める。

神殿を出てからも、アメジとタルは、フーっと睨み合っていた。

土と石だらけの、このリスタルの山道を下りながら、眼下に映るは、リスタルの街。

世界から隔離されたこの地は、百年の歳月を経ようが、大きく変わることはなく、アメジのいたあの頃と、ほぼ同じに見えた。

そう、遠目からは。この時、アメジは違和感を感じることはなかったが……。

その直後、その気持ちは吹き飛ぶことになる。

「！！」

その異常に真つ先に気づいたのはジストだった。

「タルっ！」

自分のパートナーを傍へ呼ぶ。その声にタルも状況を理解し、すぐにジストの傍へと駆けた。

アメジだけはなにも理解しておらず、え？え？となるだけだった。だが、ただならぬ事態だとすぐにわかった。

まだ日中だというのに、アメジ達の上は真つ黒な影に覆われた。見上げると、そこには巨大な怪物がアメジ達を見据えていた。

「黒水晶……」

「なっ、なんだーっ？！ このバケモンはーっっ！！」

慌てふためくアメジとは対照的に、ジストは冷静にそのバケモノを見ていた。

「思っていたより早く戻ってきたな。」

「案外この女の水晶に呼ばれてやってきたのかもたるよ。」

（もしかして、これが黒水晶？ええっ、でもなんで？急にこんなんが現れんのさっ？ そしてなんでこいつらは冷静なんだよ？まさか、ドッキリなのか？）

黒水晶は三人を確認すると巨大な口をさらに広げて、襲いかかってきた。

うっそーん。と立ち尽くしていたアメジはジストに抱きかかえられ、

そこから下三メートルへと飛び降りた。
タルも同時に続く。

その素早い判断と行動で、少し余裕の時間ができた。あっけにとられていたアメジにジストが訊ねた。

「聖乙女殿、ドクロ水晶は？」

「は？ドクロ水晶？」

「ジスト、こいつ持っていないたるよ。」

「え…。」

ジストは、本当に持っていないのか訊ねた。

アメジはなにソレ？とわけのわからない顔をしていた。
本当になにも持っていないのだ。

それを知ったジストはさっきのクールな表情からがっかりした顔になった。タルは「やっぱり」とため息をついた。

「巫女の力無しでは、黒水晶へ攻撃が届かないからな…」

「こいつ巫女のくせに、ドクロ水晶持って無いなんて、ニセモンたるよっ。」

（なんなのよ、ドクロ水晶って？

ん…、そういえば以前、トパーズ様がちゃんと修行すればその扱い方を教えてくれるって、見せてもらったおぼえが…。

そう確か、透明なドクロをかたどった石で、手のひらに乗るサイズの…。

それに水晶をこめるとかなんとか。）

とアメジがのんびり考えているうちに、黒水晶は目の前にまでやってきた。

「どわわわあーっ！」とまたも慌てふためくアメジとは反対に、

ジストとタルはクールでいた。

「しかたない。気をそらすことくらいしかできないが、タル。私たちだけでいくぞ。」

「わかつたる。」

「いいか、タル。今日は戦いをしにきたのではない。聖乙女殿を無事、ラルド様の元までお連れすることだ。」

そう言うと、ジストはアメジに街のほうまで走るようにいった。

半分パニクリながらも、アメジは頷いた。

黒水晶はまたも巨大な口を広げながら襲いかかってきた。

アメジは駆け出し、ジストは自らの水晶を高め、それを右手へと集め、激しく輝きだしたその右手に集まった水晶を、聖獣タルへと向けて放つ。

水晶使いジストの水晶によって、さらに大きな水晶をその体に宿したタルは、輝く光の生物兵器と化す。

光の兵器となったタルは光のごときスピードで、空へと駆ける。

そして直線的な動きで黒水晶へと向かった。

しかし、黒水晶は、それを簡単にかわした。

ジストもタルもそうなることはわかっていた。

聖獣は水晶使いに水晶を注ぎ込まれることにより、戦いの力を得る。それにより強力な光の兵器となるが、その状態の聖獣は、ほとんどの感覚（視覚、聴覚など）を閉じ、攻撃へとまわすため、自分の進む道すらわからなくなり、直線的な動きしかできないのだ。

その上黒水晶は、直線上の動きに強く、その行動を見切られる可能性が非常に高いのだ。

それをサポートできるのが、リスタルでは巫女と呼ばれる、女の水
晶使いなのだ。

「ひい、ひい……」

アメジはひたすら駆けていた。

とはいえここは山道下り道。おもわず転がりそうになり、アメジは転ぶ直前、下の道まで飛び降りた。

ダメ人間といわれてきたアメジだったが、運動神経はなぜかよかった。

ふう。と一息ついたアメジは上のほうにいるジスト達を見た。

「あいつら、大丈夫なのか？黒水晶と戦うなんて、だいたい滅んだんじゃないかったの？ オヤジ達の代で終わったって聞いてたのに。」

黒水晶が絶滅した後、対黒水晶の為の職業だった水晶使いと巫女は、祭りが主な仕事となっていたのだった。

巫女は踊りを舞い、水晶使いは曲を奏でる。

アメジたちが行っていた修行も黒水晶と戦わなければ無意味なものがほとんどであったが、それはもう儀式と化していた。

「はあー。とにかく街に戻らないと。トパーズ様ならなにか知ってるかもね。」

アメジは飛び降りながら、山を下り、街をめざしていた。

街を目前にし、あの声が聞こえた。

「聖乙女殿っ。」

ジストとタルが駆けつけた。

あの直後、黒水晶はなにかに呼ばれたように、「ギヤアアー」と鳴いたかとおもうと、突然羽ばたき、山脈の向こうへと飛んでいった。

のだった。

「では、聖乙女殿。ご案内します。」

（案内つて、あたしゃここの生まれなんだけど…。しかし、この男
バカ丁寧な奴だな。）

「てゆうか、その聖乙女殿でのやめてよね。あたしは……」

（ほんとに望んでなったわけじゃないし、ヤケおこしただけだもん。）

「では、なんと呼びすれば…?」

「アメジ。アメジでいいわよ。アンタは、ジストていつたつけ?」

「アメジ…」

「そっ！よろしくね、ジスト」

そう言つてジストへと歩み寄るアメジに、「近づくな!」と、タル
がどかっつぶつかる。

山道から街へと入る。山岳地帯にあるリスタルは、街も山に沿い、
段々状に建物が立ち並ぶ。

ゆえに、街は階段だらけであつた。

アメジ達が街へ入ると、たくさんの人が三人を迎えた。

しかもえらい歓迎ぶり、「この方があの……?」と皆珍しそうにア
メジを見ていた。

ジストには「族長、おかえりなさい。」の聲がかかる。アメジにと
つては異常な光景だった。

いつもバカにされてばかりだったアメジにとって、こんな歓迎をうけるのは初めてだったのだ。その時、アメジは少し違和感を感じた。だれ一人として、知った顔がないのだ。あと、街の様子もどこか違う気がした。あとでトパーズ様に会いにいくなどとアメジが考えていると、人ごみの中からジストの名を呼びながら、アメジと同じ年頃の少女が現れた。彼女はジストの姿を確認すると、うれしそうな表情で彼の傍へと駆け寄った。

「ジスト様っ！」

「サファ」

サファと呼ばれた少女は潤んだ瞳でジストを見上げた。

この雰囲気からして、二人は恋仲なのでは、とアメジは悟った。確かにいい男がそうそうフリーではない。

「マジ？」

早くもアメジの夢は崩れ去るのだった。

第4話

「ジスト様、おかえりなさい。」

「ああ、サファ。ただいま。」

さわやかに挨拶をかわす男女を隣に、アメジは一人落ち込んでいた。

夢は終わった、と。

「それより、まだ動き回らないほうがいいんじゃないか？ ケガも完治してないだろう。」

「ええ、でも心配だったから…。」

あ、ジスト様、…そちらの方がもしかして…」

とサファはアメジを見た。そしてジストがサファにアメジを紹介する。

「ああ、そうなんだ。ラルド様は正しかったよ。」

彼女が水晶の聖乙女、アメジ殿だ。」

と、ジストがおおげさに紹介すると、サファはもちろん、周囲の者たちも「おおつ。」と驚いた。

それに気づいたアメジは「んっ」と少し変な顔をしていた。

「おじい様も喜ぶわ。すぐに知らせましょ。」

とサファが後ろを振り返った瞬間、すさまじい声が響きながら、こつちへと近づいてきた。

その声は人ごみを跳ね除けながら、アメジの目の前で止まった。

「おおおつ。族長、そちらの方が聖乙女殿じゃなあつ。」

その声の主は、つるり、と頭のはげ上がった、歳は七十を迎えたばかりの男であった。

「ええ、ラルド様のおっしゃった通り、水晶神殿に…」

とジストが説明をしているが、その男はほとんどそれを耳に入れておらず、舐めるような目でアメジをジロジロと見ていた。その視線は顔よりも、胸元そして下半身、特に尻をしつように見ていた。

「ちょっとー、このジジイだれよっ？」

アメジは露骨に嫌な顔をしながら、一歩後ろへ下がった。

そんなアメジの心中も察せず、ラルドはニタニタしていた。

「アメジ殿。こちらは大神官のラルド様です。」

「大神官？なに、このジジイが？」トパーズ様は？とアメジが問いかける間もなく、ラルドが激しく接近。満面の笑みで迫った。

「おおっ、アメジ殿っ！いやー、ワシの理想どうりじゃ。」

ワシの理想どうりのいい尻じゃー。

このラルドとの出会いがアメジに激しい戦いの道をもたらすことになるのだった。

「よし、祭りじゃ、祭りじゃー。早速始めるぞい。」

ラルドが手を叩きながら言った。周りの者もわー。と盛り上がった。

「ちょ、ラルド様。祭りって…」

族長なのに状況をまったく理解してないジストを無視し、ラルドはアメジの手を掴んだ。

「でっ。なにすんじやいつ、このエロジジイがつっ。」

アメジの拳がラルドの顔にめり込んだ、がラルドはすぐに復活し、またアメジの手を掴むと一直線に駆け出した。

ぎゃーっ。と叫ぶアメジの姿が遠くなるのを、ジスト達はため息ながらに見送った。

ラルドに連れられながらアメジはリスタルの街を見た。やはり違和感をおぼえた。

ラルドが向かった先は、水晶使い達の修行を行う場でもあり、大神官の居住地でもある、街の中央にある広場前の寺院であつた。

そこは、百年前とほぼ変わらず、屋根からはこのリスタルで信仰されている太陽神と、その神の下僕とされる四の精霊が鮮やかに描かれたタンカが掛けられていた。

寺院からは香がただよってくる。中はただっぴろい中央に太陽神のどでかい像が座っている。

アメジにも見覚えのある場所だ。

ただ、あの人がいない…。

「ささー、アメジ殿。中へ……」

「ねえ、トパーズ様はどこよ？」とアメジがキョロキョロと見回していた。

「おお、トパーズ殿といえば、アメジ殿の時代の大神官ですなあ。」

「……ジイさん。のーみそ大丈夫か？」

「アメジ殿、もしやまだ混乱されとるのかな？ ま、無理もないかのう、百年も眠っておつたら。」

ふいーとため息まじりにラルドが同情した。アメジはまだ気づかない。

「あたし、何日寝てた？ 一週間とか？その間にトパーズ様辞めちやつたとか……」

おそるおそるラルドに尋ねた。その問いにラルドは笑顔で答えた。

「アメジ殿、ナイスギャグじゃわ。百年ですぞ。いやー、ワシよりずーっと年上ですわ。」

「…ほんと、大丈夫か、アンタ…」

「アメジ殿、まだ信じられませんか。ほれ、後ろをご覧くださいなされ。」
ラルドはアメジの後ろの壁を指す。

そこには、歴代大神官の名が記されていた。一番端の新しい所に、ラルドの名を確認できた。

じゃあ、このジジイが今の大神官？とアメジも信じざるをえなかった。

そして、トパーズの名を探した。ラルドをずっとさかのぼって、その名を見つけた。

（え、どーゆーこと？　なんでこんな前にトパーズ様の名前が？

百年だ？　あたしまったく老けとらんぞ、あたしが眠っている間にながったのよ？）

「理解できたかのう。ワシも大神官として、古代の書物やら解読しておつてのう。」

アメジ殿のことはこの書に載っておつてのう。」

とラルドが取り出した古びた本をアメジがバツ、と取った。そこには、水晶の聖乙女のこと記されており、黒水晶からリスタルを救ってくれる救世主となる、などと無責任なことが書かれていた。

さらにアメジが驚いたのは、その著者だった。

「オールド……？」

アメジの父オールドの著。

理解不能だった。アメジが巫女になる前に死んだ父が、アメジが聖乙女になることなどわかるはずもないのに…と。

「何だー、これ、どーゆーこつちゃー？」

「オールド殿はたしか、アメジ殿のお父上ですな。ちゃんと調べておりますぞ。」

そのオールド著の本にはたしかに、アメジの名が記されていた。

水晶の聖乙女になるということも。そして、尻がでかいというどうでもいいことも書かれていた。

「ここはほんとに百年先のリスタル？」

さらに、アメジが百年後に目覚め、黒水晶の脅威にさらされているこの時代の救世主となる、などと恐ろしげなことも書かれていた。

「うそだ。オヤジがあたしが聖乙女になるなんてわかるわけないじゃん。オヤジの名を騙っただれかのいやがらせ？」

ちよつと待て。フツーに百年もこのままでいるなんて無理でしょ？」みんなしてあたしをからかい楽しんでる。

そういうアメジにラルドは彼女の尻を撫でながら答えた。

「そう普通なら無理な事じゃ。しかし、アメジ殿だけは百年の時を越えて現代へとたどり着いた。

そうつまり、アメジ殿には特別な力がある。

このリスタルを救う、救世主なんじゃよ。」

アメジにぶつ飛ばされながらも、ラルドは笑顔でしゃべっていた。

アメジは立ち尽くしながらも冷静に考えてみた。

これが水晶の聖乙女の力？百年の時をも越える、巨大な水晶でも身につけたというのか？

街の姿もあの頃となんだが違う。知った顔が一人としていない。族長も大神官も、モンドとトパースでなく、ジストとラルド。

このじいさんの言うことが真実ならつじつまがあう。そこでアメジは気づいた。

「じゃー、ジストはモンドの……」
子孫、であることに。

「おおつ、アメジ殿は族長の先祖と顔見知りじゃったのか。」

「ああ、そうだ。あたしゃーあいつのせいで赤っ恥をー」
忘れかけてた怒りがふつふつとよみがえってきた。

段々と赤くなるアメジの顔もラルドの次の言葉で色がひいた。

「アメジ殿は最後の水晶の聖乙女じゃからのう。」

「へ？最後？」

「おお。長年続いた聖乙女制度もアメジ殿で終わっとるんじゃ。ト
パーズ殿が廃止したらしいんじゃ。」

（トパーズ様が…なんで…？）

その真意は今のアメジにはわからなかった。

「さて、そんな難しい話は後において、祭りじゃ、祭り。」

アメジ殿を歓迎する祭りを行うんじゃよ。」

難しい顔をしたアメジにドカーンとバカ明るくラルドが言った。ア
メジが来るまでに、祭りの準備は整っていた。

族長がリスタル族の長なら、大神官は、水晶使い巫女たちの頂点に
立ち、弟子たちの指導にあたるはもちろん、族長のサポートを務め
たり、水晶の研究や、祭りを仕切るのも重要な仕事である。水晶使
いの長なのだ。

特にこのラルドは、明るい性格も証明するとおり、大の祭り好きな
のだ。おまけにリスタル一の女好きでもあり、その地位を利用した

セクハラも数しれない。さらに尻フェチで、尻のでかいアメジはラルドにとって理想そのものであった。今後もこのジジイにアメジは振り回されることになりそうである。

「さて、祭りに行きますぞっ。アメジ殿歓迎の大祭りじゃー。」

「祭りって…。え、ちよつと、あたしは救世主なんか…。」
面倒くさがりアメジ、とても嫌な予感がした…。

第5話

「祭じゃー！アメジ殿歓迎の大祭じゃー！！」

ラルドの大きな声を合図に人々は集まり、日が落ちる頃には祭りの準備は整っていた。

街の中央に位置する寺院前の広場に、リスタル中の人たちが集い、にぎやかな祭り独特の空気が漂っていた。

広場中央の祭りの時のみに設置する台を丸く囲むように、楽器を奏でる男達に、その内側で踊る娘達。その他観衆…楽器の音、人々の声、広場は祭りの音でいっぱいになった。

祭りだ祭りだとはしゃぐラルドとは対照的に、アメジはがっくりとしていた。

（はあ、なんなんだ、このジジイは……それに救世主ってなんなのよ？

はあ？……てかさ、マジでここは百年後なの？

聖乙女の儀式って…、あたしはただムカツキながら眠っていただけなのに。

わけわからんよ、でもたしかに、だれ一人知ったやつがないし…信じるしかないのか？）

ハアーと深いため息をついて、アメジはめんどくさそうな表情でラルドを見た。逆にラルドは満面の笑みで返してきた。

ラルドがアメジをテント下の席に着かせると、二人のもとにジストがやってきた。

「ラルド様、なにもこんな時期に祭りなど行わなくても・・・。」

「なにを言つとるんじゃ族長。こんな時だからこそ祭りをやってみなのが持ちを高めてやるんじゃないろうが。ほれ、アンタもさっさと

そこに座りなされ。」

そう言つてジストをアメジの横の席にと着かせた。

「さあ、皆の衆アメジ殿のために祭りをとおいに盛り上げようぞ。さあさあ歌えや飲めや踊れや騒げや、ワハハハハ。」

ラルドの合図とともにさらに祭りは盛り上がった。ラルドは大きな声で笑いながら酒を飲み始めた。

「おい、なにしとる！もつと美味しいものを持ってこんか！ささ、アメジ殿どんどんいってください。」

うんざりしていたアメジも、目の前に差し出される数々のご馳走を目にするととたんに嬉々とした顔になった。

「うひょー、いいの？おいしそー。んじゃま、お言葉に甘えていたできます。」

単純アメジ、食事中は悩みなど忘れる主義。乙女であることを忘れ、飢えた野獣のごとくかつくらう。

「おおお、いい食いつぷりですなー。さすがアメジ殿、いい尻をしとるだけあるわ。」

「ぶふおい！！尻は関係ないわっ」

（なんかわけわかんないけど、すっげ美味いんですけど、こんな歓迎初めてなんですけどっ、もしかして族長の妻になれなくても楽しんでるかも？）

アメジの中に新たな道が見えた気がした。

アメジがメシにかつくらっている最中、演奏の曲調が変わり、踊り子達の舞いががらりと変わった。

観衆の視線があるところに集中した。

「おおっ、始まりますぞ、あやつの舞いが。」

ラルドがそう言っ て視線をやった先にいたのは、神の下僕である精霊の面をつけた、他の踊り子とは違った衣装を身に纏った娘だった。「！サファ。ケガは大丈夫なのですか？」

その娘がサファだと気付いたジストは心配げにラルドに訊ねた。

「舞いに支障はなかるう、さあ始まりますぞアメジ殿。」

「ふえ？」

ラルドに言われてアメジは初めて広場中央の舞いの場に目をやった。精霊に扮したサファは曲にあわせてゆつくりと、中央の舞いの台へと登っていった。

巫女は女の水晶使いでもあり、踊り子の最重要踊り手でもある。

巫女であるサファだけが舞うことを許される精霊の舞いは、かすかに体内の水晶を放ちながら舞う特別な踊り。

その踊りの力は、舞いを見るものの気持ちさをさらに高ぶらせることができる。

サファの舞いによって、広場中の人々の気持ちは一体となり、そこはさらに不思議な空気につつまれていた。

その踊りを見ていて、アメジの中のある感情も高まっていた。

「ふむふむ、さすがはワシの孫じゃ。今となつてはあの舞いができるのはあやつだけじゃかるう……」

「ラルド様……」

遠い目をしたラルド、少ししてアメジにこう言った。

「そうじゃ！アメジ殿なら、すばらしい舞いが舞えるに違いない！アメジ殿、ぜひひとつ舞ってはもらえんかの？」

「えっっ！？」

「ぜひとも頼みますわ、アメジ殿。あやつらにありがたい舞いを見せてやってくれんかの？！」

「ちよっ……ちよつと待ってよ……な、なに言い出すんだよ？いきなり……」

アメジ焦る、焦るにはわけがある、

つまりアメジは……。

第6話

「さあ、アメジ殿のありがたきたまらん舞いを見せてやってくださらんかのう。」

酒に酔った赤らんだ顔のまま、ラルドは隣に座るアメジに頼み込む。
「ちょ……ちよつと、いきなりなに……」

焦るアメジ。

「おい、聖乙女殿の舞が見られるらしいぞ。」

近くにいただれかがそう言ったのを合図に周りは盛り上がり始める。聖乙女のありがたい舞、だれも見たい見たいと騒ぎ出した。それそれ。

ヤバイ、たらりと汗が伝い、さらに焦るアメジ。

「さあさあ、アメジ殿、見せてくだされ。演奏はアメジ殿に合わせますからの。」

「あ……あの……ちよつと……今日は調子が……腹が……悪いけど少し向こうで休んでくるわ……。じゃ。」

そう言つて、腹をさすりながらアメジは席を立った。

「な、なんとアメジ殿食べすぎですか？ ややそれは大変じゃ、ワシが腹をさすつて……」

「じゃ、あたしあつちのほうで休んでくるわ、今日はありがとね、ラルドのじいさん。」

アメジはそそくさとその場を去っていった。慌ててアメジの後を追おうとするラルドは、酔いがまわって席を立とうとすればふらついてしまった。

「ラルド様、アメジ殿は私が……」

ふらつくラルドをジストは席に座らせると、アメジの後を追った。

「おお、またんか族長、ワシがアメジ殿の尻をさす……うひいっく」

アメジが抜けた後も祭りは続き、人々は盛り上がっていた。

「はぁ・・・ヤバ・・・踊りなんて、やれるかったの。」

祭りの音から遠ざかった広場を見下ろせる場の階段の上で、アメジはため息をついた。

「踊りなんて、ぜってーやらねえ。」

アメジ、踊りを嫌がるにはわけがあった。

巫女は女の水晶使いでありながら、祭りの大事な踊り手でもある職業。

水晶使いの能力と同様に踊りの能力も巫女には必要不可欠なのだ。

しかしアメジは、踊りがまったく苦手だった。

幼い頃、踊りの下手くそっぷりを周りに笑われていたことがトラウマとなり、それ以来、人前ではなにがなんでもぜったいに踊らないと誓ったのであった。

そんなアメジがなぜ巫女になれたかというところ・・・、親のコネというやつである。

父オールドと親交のあった大神官トパーズは、オールド亡き後はアメジの親代わりと成り、アメジを巫女にしたのだ。

アメジを巫女として鍛えてやるつもりが、アメジのぐうたらぶりは予想以上で、アメジはほとんど巫女の修行をしなかったのだ。

当然踊りなど、一度も練習しなかった。

ゆえにアメジは人前では踊らぬと固く誓っているのだった。

「はぁ、でもあのジジイしつこそう、カンベンしてほしいよ。」

ふう、ともう一度深いため息をついた後、自分を呼ぶ声に気付いた。

「アメジ殿！」

階段を駆け上って、ジストがアメジの前に現れた。

「！う・げ」

「お体は、大丈夫ですか？」

「あ、いや、まあ...でも踊りはきついか？あはは。」

「すみません、みながムリを言って・・・」

「ははは、いーってことよ。なんせ聖乙女ですから（ちょっと調子ぶっこいてる？あたし）」

アメジの様子を見て一安心したジストは、祭りの光に包まれている広場を見下ろした。

「いつ黒水晶が襲ってくるかわからない、いつ何時も気を抜いてはいけない状態なんです。

ラルド様の祭り好きも考えものなのですが……。

アメジ殿の歓迎は、黒水晶を倒した後でちゃんと行いたいと思っています。」

「へへへ、そう？ ま歓迎会は大歓迎だけだよ。」

ジストの視線は広場を見下ろした後は、空へと向かっていた。黒水晶を常に警戒していた。

「そつえば、祭りで巫女の舞いはひとりだけだったけど、他の人はどうしたわけ？」

祭りの様子をふと思い出して訊ねた。

「・・・巫女は、彼女サファひとりだけなんです。」

「へ？」

「他のものは、みな黒水晶に殺されました。

彼女の姉たちであった巫女たちも、多くの水晶使いや聖獣も、黒水晶との戦いに敗れて、リスタルの民のほとんどが黒水晶に家族を奪われ、深い傷を負った。……早くやつを倒し、人々を守る。それが族長としての私の使命なんです。」

（黒水晶に、みんな殺された？・・・ずいぶん皆明るいから、そんなかんじ受けなかったけど、黒水晶ってそんなやばいやつなの？）

「先日唯一の巫女のサファが負傷し、しばらく戦えないと思っていたところ、ラルド様から聖乙女殿のことを聞き、神殿に行ったんです。・・・そして、アメジ殿、あなたは現れた。」

現れたというよりか、正しくはジストによって起こされたアメジ。

「お願いしますアメジ殿！私たちに力を貸してください。」

リスタルの人々の希望の光となっていたきたいのです！」

「うえっ？」

アメジに頭を垂れるジストにアメジは少しとまどった。

それってつまり、あたしにあの

バケモノと戦えって言ってるわけ？

黒水晶……。

アメジが幼い頃、父オルドと遺跡を巡っていた頃、土壁に眠る化石を目にしたことを思い出した。

「うわっ、オヤジ、コレすげーでけーバケモン！」

「ああ、黒水晶だな、こりゃいつの時代かな……。しかしこいつもでけーな。んまあ、俺がやつつけたやつはこの倍だったけなあ？」

むき出しになったその化石をさすりながらオルドは言った。

「ええっ？マジでオヤジこんなバケモノ倒したのか？」

「ああ、マジよ。あのころの俺は、かつこよかったぜえ。ま今は今で輝いているがな。」

アメジ、お前もめんどくさがっていねーで、

かつこいい生き様つての見せつけるかつこいい人間になるんだな。

俺を見習って、な。」

「は？なに言ってたんだよ？バカオヤジのくせによ！」

「は、なにを言うかバカ娘。黒水晶ひとつも倒してねーガキに俺のかつこいい生き様を否定する権利はないってのよ。」

「なんだとームキー！」

父親とバカみたいな口喧嘩を繰り返しながら、遺跡の中を渡り歩いていたあの幼き日々、アメジは思い出し懐かしく、そして……

「くっそー、やっぱオヤジムカツク！」

「へ？」

「ハン、オヤジにやれてあたしにやれないじゃないじゃんよ！

黒水晶なんて三秒でやれるってのよ。」

アメジは握りこぶしを天へと突き出した。空の人となった父オールドにむかっつての挑戦状。

「本当ですか？アメジ殿！」

「へ？」

ジストの声で回想シーンからリアルへと引き戻されたアメジ。

「ねえ、もちろん黒水晶倒したら、ちゃんと歓迎会してくれるんでしょ？美味しいものいっぱいくれるんでしょ？アメジ様万歳でしょ？祭ってくれるんでしょ？アメジ伝説轟くんでしょ？」

「え、ええ…、もちろんですよ。」

興奮気味のアメジに少し引くジスト。

（そっかー、なにも族長の妻にこだわることもなかったんじゃない？
楽しんで生きる道、見つけた！かも）

アメジの返事に喜び、早速ラルドのもとへ報告に向かおうとするジストをアメジは呼び止めた。

「ねえ、ジスト、あんたさ、年はいくつなの？」

階段を七段ほど下ったさきでジストが振り向いた。

「え？…22になりますか？」

「年上じゃん！あの子、そのアメジ殿っていうの止めてくんない？あと敬語も。」

あたしかたつくるしいの苦手なんだよね。」

少ししてからジストが答えた。

「そう、ですか・・・なら遠慮なく。

アメジ、ありがとうよろしく頼む。」

「おう、こっちこそよろしくな、ジスト。」

アメジの中で高まっていた感情・・・それは...

救世主になれば、みんなにちやほやされて、
楽できんじゃん。うぷ
ぷ。

しかし、アメジ気付いていなかった。その矛盾に・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310z/>

アメジスト

2011年12月21日21時56分発行